

### 第三節：価値形態または交換価値

#### 3.Die Wertform oder der Tauschwert

(1) 商品は、使用価値または商品体の形態をとて、鉄やリンネルや小麦などとして、この世に生まれてくる。これが商品のありのままの現物形態である。だが、これらが商品であるのは、ただ、それらが二重なものであり、使用対象であると同時に価値の担い手であるからである。それゆえ、商品は、ただそれが二重形態、即ち、現物形態と価値形態とを持つかぎりでのみ、商品として現れるのである、言い換えれば商品という形態を持つのである。

(2) 商品の価値対象性は、どうにもつかまえようの分からぬ代物だということによって、マダム クイックリーとは違っている。商品体の感覚的に粗雑な対象性とは正反対に、商品の価値対象性には一分子も自然素材は入っていない。それゆえ、ある商品をどんなにいじり回しても、価値物としては相変わらず掴まえようがないのである。とはいって、諸商品は、ただそれらが人間労働という同じ社会的な単位の諸表現である限りでのみ価値対象性をもっているのだということ、従って、商品の価値対象性は純粋に社会的であるという事を思い出すならば、価値対象性は商品と商品との社会的な関係のうちにしか現れ得ないということもまたおのずと明らかである。いま、我々は再び価値のこの現象形態に帰らなければならない。

(3) 諸商品は、それらの使用価値の雑多な現物形態とは著しい対照をなしている1つの共通な価値形態—貨幣形態を持っているということは、誰もが良く知っていることである。いまここでなされなければならない事は、この貨幣形態の生成を示すことであり、従って、諸商品の価値関係に含まれている価値表現の発展をその最も単純な最も目立たない姿から光まばゆい貨幣形態に至るまで追跡する事である。これによって同時に貨幣の謎も消え去るのである。

(4) もっとも単純な価値関係は、明らかに、ある商品を、違った種類の商品で示すことである。それゆえ、二つの商品の価値関係は、一商品のための最も単純な価値表現を与えるのである。

A.単純な、個別的な、または偶然的な価値形態 A) Einfache, einzelne oder zufällige Wertform (p65)  
x 量の商品 A = y 量の商品 B または、x 量の商品 A は、y 量の商品 B に値する。

(20 エレのリンネル = 1 着の上着 または、20 エレのリンネルは、1 着の上着 に値する。)

#### 1.価値表現の両極、相対的価値形態と等価形態

(Die beiden Pole des Wertausdrucks: Relative Wertform und Äquivalentform) (p65/原 63)

(1) すべての価値形態の秘密は、この単純な価値形態のうちに潜んでいる。それゆえ、この価値形態の分析には固有な困難がある。

(2) ここでは、二つの種類の異なる商品（我々の例では、リンネルと上着）は、明らかに違った役割を演じている。リンネルは、自身の価値を上着で表しており、上着はその価値表現の材料として役立っている。前者は能動的に演じ、後者は受動的な役割を演じている。リンネルの価値は相対的価値を表し、相対的価値形態にある。第二の商品上着は、等価物として機能しており、等価形態にある。

(3) 相対的価値形態と等価形態は、互いに属しあい互いに制約しあっている不可分な契機であるが、同時にまた、同じ価値表現の、互いに排除しあう、対立する両極である。この両極は、つねに、

価値表現によって互いに関係させられる別々の商品のうえに分かれている。たとえば、リンネルの価値をリンネルで表現することはできない。 $20\text{ エレのリンネル} = 20\text{ エレのリンネル}$ はけっして価値表現ではない。リンネルの価値は、ただ相対的にしか、即ち、別の商品でしか表現されえないものである。それゆえ、リンネルの相対的価値形態は、なにか別の1商品がリンネルに対して等価形態にあるということを前提しているのである。他方、等価物の役を演ずるこの別の商品は、同時に相対的価値形態にあることはできない。それは自分の価値を表しているのではない。

それは、ただ別の商品の価値表現に材料を提供しているだけである。

(4) 勿論、等式は逆の関係をも表しているから、 $20\text{ エレのリンネル} = 1\text{ 着の上着}$  または  $20\text{ エレのリンネル} = 1\text{ 着の上着}$  は  $1\text{ 着の上着} = 20\text{ エレのリンネル}$  または  $1\text{ 着の上着} = 20\text{ エレのリンネル}$  に値する、ということが、逆の  $1\text{ 着の上着} = 20\text{ エレのリンネル}$  は  $20\text{ エレのリンネル}$  に値するの意味にもなる。がしかし、逆に置く場合は、等式の左にくる  $1\text{ 着の上着}$  の価値を相対的形態で表すことになり、上着に代わってリンネルが、等価物になるのである。だから、同じ商品が同じ価値表現で同時に両方の形態で現れることはできないのである。この両形態は、むしろ対極的に互いに相手を排除しあうのである。

(5) そこで、ある商品が相対的価値形態を表しているか、逆の等価形態を表しているかは、全くのところ価値表現におけるその都度の位置だけによる。即ち、その商品が、自分の価値を表現される商品であるのか、それともそれで価値が表現される商品であるのかということだけによって定まるのである。

## 2. 相対的価値形態 (2.Die relative Wertform) (p67/原 p64)

### (a) 相対的価値形態の内実 a) Gehalt der relative Wertform (p67/原 p64)

(1) 1商品の単純な価値表現が二つの商品の価値関係の中に、どのように潜んでいるかを見つけるには、この価値関係をさしあたりますその量的な面から切り離して考察しなければならない。人々はこの点で、大抵は、逆のことをやるのであって、価値関係のうちに、ただ、二つの商品種類のそれぞれの一定量が互いに等しいとされる割合だけを見ているのである。人々は、いろいろな物の大きさはそれらが同じ単位に還元されてからはじめて量的に比較されうるようになるということを見落としているのである。ただ同じ単位の諸表現としてのみ、これらの物の大きさは、同名の、従って通約可能な大きさなのである。(注 17)

(注 17/p67) S・ベーリのような価値形態の分析に携わってきた少数の経済学者が少しも成果を挙げ得なかつたのは、1つには彼らが価値形態と価値とを混同しているからであり、第二には、彼らが実際的なブルジョアの粗雑さの影響のもとで、はじめからただ量的規定性だけに着目しているからである。

(2)  $20\text{ エレのリンネル} = 1\text{ 着の上着}$  であろうと、 $= 20\text{ 着の上着}$  であろうと、または  $= x\text{ 着の上着}$  であろうと、即ち、一定量のリンネルが多くの上着に値しようと、少ない上着に値しようと、このような割合は、どれでもつねに、価値量としてはリンネルも上着も同じ単位の諸表現であり、同じ性質の諸物であるということを含んでいる。リンネル=上着というのが等式の基礎(リンネル : 相対的価値形態=上着 : 等価形態)である。

(3) しかし、質的に等価された2つの商品は、同じ役割を演ずるのではない。ただリンネルの価値だけが表現される。では、どの様にして? リンネルが自分の「等価物」または自分と「交換され

うるもの」としての上着に対してもつ関係によって、である。この関係の中では、上着は、価値の存在形態として、価値物として、認められる。なぜならば、このような価値物としてのみ、上着はリンネルと同じだからである。他面では、リンネルそれ自身の価値存在が現れてくる。即ち、独立した表現を与えられる。なぜならば、ただ価値としてのみリンネルは等価物または自分と交換されうるものとしての上着に関係することができるからである。

(4) 我々が、価値としては商品は、人間労働の単なる凝結である、と云うのならば、我々の分析は、商品を価値抽象に還元しはするが、しかし、商品にその現物形態とは違った価値形態を与えるはしない。一商品の他の一商品に対する価値関係の中ではそうではない。ここでは、その商品の価値性格が、他の一商品に対するそれ自身の関係によって現れてくるのである。

(5) p68 上着が価値物としてリンネルに等価されることによって、上着に含まれている労働は、リンネルに含まれている労働に等価される。しかし、織布との等価は、裁縫を、事実上、両方の労働のうちの現実に等しいものに、人間労働という両方に共通な性格に、還元するのである。

このような回り道をして、次に、織布もまた、それが価値を織るかぎりでは、それを裁縫から区別する特徴をもってはいないということ、つまり、抽象的人間労働であるということが、言われているのである。ただ異種の諸商品の等価表現だけが価値形成労働の独自な性格を顕わにするのである。というのは、この等価表現は、異種の諸商品のうちにひそんでいる異種の諸労働を、実際に、それらに共通なものに、人間労働一般に、還元するのだからである。

(6) しかし、リンネルの価値をなしている労働の独自性格を表現するだけでは、充分ではない。人間の労働力は、価値を形成するが、しかしその労働自体が価値なのではない。それは、対象的形態において、価値になるのである。リンネル価値を人間労働の凝固として表現するためには、それを、リンネルそのものとは物的に違っていると同時にリンネルと他の商品とに共通な「対象性」をして表現しなければならない。課題は、すでに解決されている。

(7) リンネルの価値関係のなかで上着がリンネルと質的に等しいもの、同じ性質のものとして認められるのは、上着が価値であるからである。それゆえ、上着はここでは、価値がそれにおいて現れる物、または手でつかめる現物形態で価値を表しているものとして認められているのである。ところで、上着は、上着商品の身体は、たしかに1つの単なる使用価値である。上着が価値を表していないことは、あり合わせのリンネルの一片が価値を表していないのと同じ事である。このことは、ただ上着がリンネルとの価値関係のなかではその外でよりもより多くを意味しているという事を示しているだけである。(p70)

(8) 上着の生産では、実際に、裁縫という形態で、人間の労働力が支出された。それゆえ、上着の中には人間労働が蓄積されている。この面から見れば、上着は「価値の担い手」である。そして、リンネルの価値関係のなかでは、上着はただこの面だけから、従って、ただ具体化された価値としてのみ、価値体としてのみ、認められるのである。ボタンまでかけた上着の現身にもかかわらず、リンネルは上着のうちに同族の美しい価値魂を見たのである。とはいって、リンネルに対して上着が価値を表すということは、同時にリンネルにとって価値が上着という形態をとることなしには、できることである。

(9) こうして、上着がリンネルの等価物となっている価値関係のなかでは、上着形態は価値形態として認められる。それゆえ、商品リンネルの価値が商品上着の身体で表され、一商品の価値が他

の商品の使用価値で表されるのである。このようにして、リンネルは自身の現物形態とは違った価値形態を受け取る。

(10) 要するに、…労働は人間労働という抽象的属性においてリンネルに等しいとされるかぎり、つまり価値であるかぎり、上着はリンネルと同じ労働から成っている、と言うのである。自分の高尚な価値対象性が自分のごわごわした肉体とは違っているということを言うために、リンネルは、価値は上着に見え、従って、リンネル自身も価値物としては上着にそっくりそのままである、と言うのである。

(11・まとめ) こうして、価値関係の媒介によって、商品Bの現物形態は、商品Aの価値形態になる。言い換えれば、商品Bの身体は、商品Aの価値鏡になる。商品Aが、価値体としての、人間労働の物質化としての商品Bに関係することによって、商品Aは使用価値Bを自分自身の価値表現の材料にする。商品Aの価値は、このように、商品Bの使用価値で表現されて、相対的価値の形態をもつのである。(注18/p71)

(注18: 見ようによつては人間も商品と同じ事である。人間は鏡をもつてこの世に生まれてくるのでもなければ、私は私である、というフィヒテ流の学者として生まれてくるのでもないから、人間は最初はまず他の人間のなかに自分を映して見るのである。人間ペテロは、彼と同等なものとしての人間パウロに関係することによって、はじめて人間としての自分自身に関係するのである。しかし、それとともに、またペテロにとっては、パウロの全体が、そのパウロ的な肉体のままで、人間という種族の現象形態として認められるのである。) (p72)